

そうさく かねば
惣作・鐘場遺跡

所在地 瀬戸市惣作町、鐘場町
 調査理由 県道瀬戸設楽線建設
 調査期間 平成12年12月～平成13年3月
 調査面積 4,400 m²
 担当者 北村和宏・宇佐見守・鈴木達也・早野浩二

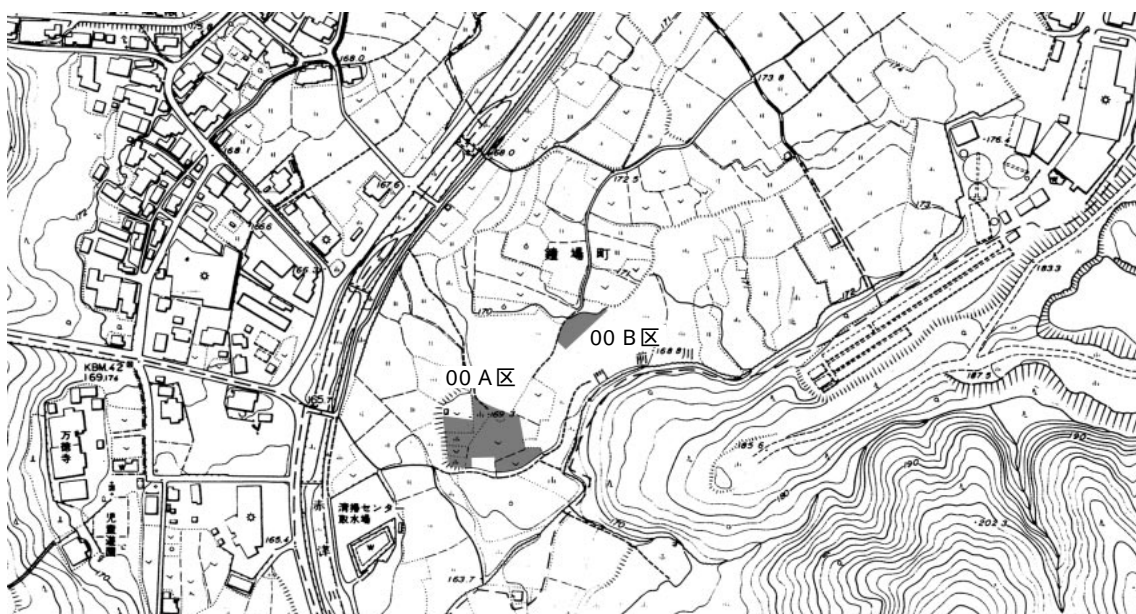


調査地点 (1/2.5万「瀬戸・猿投山」)

調査の経過 調査は県道瀬戸設楽線建設に先立つもので、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じて委託を受け、今年度より発掘調査を実施している。平成12年度は平成12年12月から平成13年3月にかけてA区3,000 m²、B区1,300 m²、範囲確認100 m²、計4,400 m²の発掘調査を実施した。

立地と環境 惣作・鐘場遺跡は瀬戸市惣作町、鐘場町に所在し、矢田川の支流赤津川の左岸に形成された標高170 m前後の段丘上に立地する。遺跡の周囲には、太子縄文遺跡、太子遺跡が南接するほか、約1 km北東に瓶子窯跡、巡間E窯跡、約1.5 km北東には本センターが発掘調査を実施した八王子、長谷口遺跡がある。

調査の概要 今年度の調査の結果、A区において後期旧石器時代終末～縄文時代草創期、縄文時代中期、弥生時代終末～古墳時代前期、飛鳥時代、平安時代前期、中世、近世と各時期の遺構・遺物が確認され、本遺跡が断絶をともしつつも長期間にかけて継続する複合遺跡であることが明らかとなった。ただし、耕起にともなう削平によって遺構の残存は必ずしも良好でなく、A区西半部では遺構はほとんど確認されていない。一方、B区は調査条件の制約から全面的な調査が不能で、試掘坑による部分的な調査にとどめざるをえなかった。以下に調査の内容を概ね把握しえたA区についてその成果を概説する。



調査区配置図 (1:5,000)

- 旧石器～ A区の南端は段丘面が落ち込み、地山となる砂礫層の上面に黄灰色土が堆積する。後期旧
 縄文時代 石器時代終末～縄文時代草創期に相当する石器類はこの堆積土中、あるいはその直上から出
 土した。出土した石器類には有舌尖頭器1点、数点の搔器などの製品も含まれ、上層の堆積
 土中からも木葉形尖頭器の基部片などが出土している。
- 縄文時代中期 縄文時代中期の遺構としては竪穴住居3棟(S B 07、09、10)と、土坑群を検出した。こ
 れらの遺構は段丘面の南端付近に展開する。S B 07は長径5m、短径4mの西側に膨らむ不
 整の円形を呈し、中央やや東寄りに石囲炉を付設する。石囲炉は長辺1.2m、短辺1.0m、や
 や胴張りの長方形で、炉の上面は顕著に被熱していた。炉の中央には径25cmの小ピットをと
 もなう。S B 07の炉内や柱穴内からは中期後半に相当する深鉢が数個体出土している。S B
 09、10は円形にめぐる柱穴や壁溝を確認したにすぎないものの、S B 09では浅い掘り込みを
 ともなう地床炉が確認された。土坑群は竪穴住居の周囲に散在し、なかには掘形が明確な袋
 状を呈するものも認められる。遺物は縄文土器のほか、石鏃、石錘、石斧などの石器が出土
 しており、とくにA区南東の段丘斜面には剥片が集中していた。石材は黒曜石とチャートが
 主体となる。
- 弥生～ A区ではガラス小玉が2点出土したことから、調査区周辺が弥生時代終末～古墳時代前期
 古墳時代 の墓域として利用されていた可能性がある。A区北東で検出した方形にめぐる溝S D 05を方
 形周溝墓との見方をすれば、一辺が7m、一辺の溝の中央が途切れる平面形として復原する
 ことも可能であると思われる。S D 05の周辺ではわずかながら土器も出土している。
- 飛鳥時代 飛鳥時代の遺構としてはA区北東部で検出された竪穴住居群(S B 01～S B 06)がある。
 竪穴住居から遺物はほとんど出土しないが、中世の溝に先行すること、多くが竈を付設する
 こと、柱穴の一つからほぼ完形の須恵器蓋と土師器甕が出土したことから、該期の遺構とし
 た。
- 平安時代 平安時代前期の遺構として竪穴住居1棟(S B 08)を段丘斜面で検出した。S B 08に付設
 された竈の残存はきわめて良好で、天井の一部、煙道、石製支脚が確認できた。S B 08では、
 住居の床面付近から数個体の須恵器椀、竈から灰釉陶器皿片、土師器甕が出土した。
- 中世・近世 中世の遺物は、段丘斜面の整地層を中心に山茶椀や古瀬戸製品など、ややまとまった出土
 をみるものの、検出される中世の遺構はごくわずかにとどまる。また、近世の遺構として、
 段丘斜面の整地層を掘り込む排水溝(S D 01)、甕埋設土坑など、耕作に関連する遺構が検
 出された。S D 01は排水溝と考えられる溝で、瀬戸窯産陶器半胴甕(筒形)を確認しただけ
 で約13個体、横位に埋設していた。
- ま と め 遺構・遺物が比較的希薄で、断片的な情報に頼らざるをえないものの、今年度の発掘調査
 によって、遺跡の具体像を一定程度明らかにできたものと思われる。
- 後期旧石器時代終末～縄文時代草創期の石器群は生活面や遺構などを伴わないものの、
 比較的安定した層位で出土することから、その資料的価値は評価されよう。また、縄文時代
 中期の遺構群は当地域における縄文時代集落の景観復原に貴重かつ有意な情報を提供するも
 のと思われる。断定的ではないものの、弥生時代終末～古墳時代前期の墓域に関連する遺構・
 遺物は当地域においてはまったくの空白時期に相当するものであるだけに、今後の調査の進
 展には期待が寄せられよう。

(早野浩二)



A区全景



A区中央



有舌尖頭器出土状況



S B 07



S B 07 石囲炉



S B 07 石囲炉出土縄文土器



S B 09



S D 05 (方形周溝墓 ?)



飛鳥時代竪穴住居群



S B 08 竈



排水溝 (S D 01)